

「両さん」から学ぶこと



私たちの『友引通信』が200号を迎えました。約16年半の年月です。そんな時、秋元治氏が「週刊少年ジャンプ」に約40年間連載し続けた人気漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所（こち亀）』が終わりを迎えることになるというニュースが飛び込んできました。コミック本に至っては200巻です。後日、ギネスに登録されたそうです。お疲れさまでした。

私は『こち亀』をテレビで見た派なのですが、東京の下町の派出所に勤務する警察官・両津勘吉（愛称・両さん）が引き起こすドタバタ劇。いつも同僚や周囲の人を巻き込んでストーリーが展開されていきます。現実にはそんな警察官など存在しないわけですが、昔の日本の中には、特に『こち亀』の舞台になった下町などには、本当はルール違反なのだけれど、「まあしょうがねえか」的な人情文化が存在したことは確かです。決して「いいかげん」という意味ではありません。そうした下町の郷愁を時々「ちらり」とさりげなく描いていたのが『こち亀』だったと思います。世の中は「持ちつ持たれつ」です。

私の母は、私が生まれる前から小学校の先生をしていました。当時の「師範学校（現在の国立大学教育学部）」を卒業したわけでもなく、終戦時に先生不足のため仕方が無く採用されたそうで、それに伴う苦労も多かったそうです。現在放映中の『とと姉ちゃん』の時代と言えるで

しょう。女性が結婚後も仕事をするのは、特に岐阜のような所ではとても希なことです。私が生まれ幼稚園に行くまでは、そのほとんどの時間をお隣（お隣もお寺）で過ごし、お庫裡さんに畑仕事に連れて行ってもらいました。今の隣人関係では考えられないことでしょう。しかし50年ほど前にはそうだったのです。最近少子化問題で幼稚園、保育園を建設しようとする、子供の声が騒音だと反対する住民がいるそうです。それも年配者ですから悲しいです。

私はこの地域で初めて幼稚園へ入園した子どもでした。当時の保育園は各自が送り迎えをしなければならなかったのも母には無理でした。通園バスのある岐阜市内の幼稚園へ通ったのです。時々母がお昼過ぎに幼稚園へ急ぎやっ



て来て、そのまま私を連れて勤務先の小学校へ戻って行きました。どうやら給食後の昼休みに抜け出してきたのだと思われます。そして母が受け持つ教室に連れて行かれ授業が終わるまで生徒さんと一緒に椅子に座っていたことを覚えています。夕方一緒に帰宅。

現在でしたらそんな先生は大問題になることでしょう。その反面、生徒のお母さんからも夫婦喧嘩等の相談の電話が毎晩のようにありました。また学校へ行きにくい子が日曜日にウチへ遊びに来て一日過ごして行きました。母は、師範学校では学んでいませんが人気のある先生だったようで、私が20歳の時に祖母の介護のため退職しました。

俊徳丸